

(日置郡市来町大字川上字瀧之段)

位置と環境

瀧之段遺跡は串木野市との境に流れている八房川の上流約5kmに位置し矢岳の裾野にあたる標高約25mの台地傾斜部に立地している。

この台地の縁辺部には小さな滝がありそこから流れ出した水流は遺跡の裾野を通り八房川へと通じる。

調査の経緯

県営中山間地域総合整備事業に伴って市来町教育委員会が平成6年3月に確認調査を実施し、約620㎡の範囲で遺跡が確認できた。そこで平成9年8月から12月にかけて本調査を実施した。

遺構と遺物

平成5年度の調査では縄文時代該当の層より黒曜石片が出土した。土器は確認できなかった。下層の縄文草創期から旧石器時代に該当する暗茶褐色粘質土層(通称チョコ層)からは細石刃核と細石刃が出土し平成5年度の段階では旧石器時代終末期と思われる(その後の調査で縄文時代草創期の遺物と確認された)。

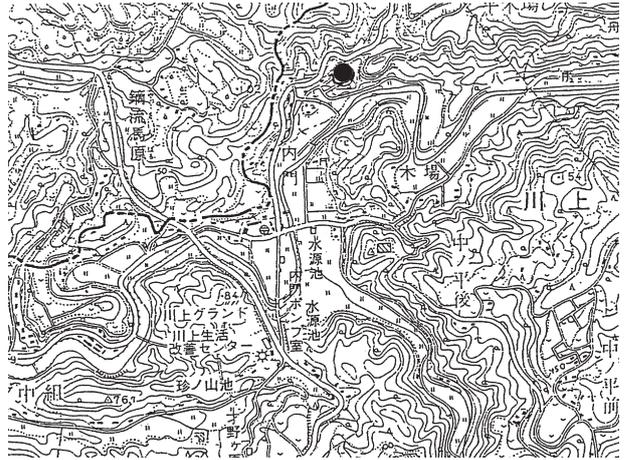
平成9年度に本調査を実施することとなりまず黒

I層	表土
II層	
IIIa層	アカホヤ火山灰二次堆積
IIIb	アカホヤ火砕流
IV層	
V層	黒褐色土層
VI層	薩摩火山灰層
VII層	暗茶褐色粘質土層
VIII層	シラス及び溶結凝灰岩

瀧之段遺跡土層柱状図

曜石の出た縄文時代該当の黄褐色土層の調査を開始した。この層からは円筒形の山形押型文土器、手向山式土器、円筒形条痕文土器、塞ノ神式土器などが出土した。

石器では搔器や石鏃、石斧などが出土し磨石や石皿も多く出土した。遺構は溝状遺構が1条、集石遺構が4基検出された。集石遺構からは円筒形山形押



第1図 瀧之段遺跡の位置

型文土器と円筒形条痕文土器が同じレベルで出土し同時期に使用されたものか今後の検討を要する。

下層の縄文草創期から旧石器時代に該当する暗茶褐色粘質土層(通称チョコ層)の調査ではA地点でハンマーストーン、細石刃核、ブランク、細石刃、草創期の無文の土器片、石鏃が40本出土した。遺構などは検出されなかった。B地点では石核、隆帯文土器、石鏃1本出土し、更に配石遺構(船形配石炉の可能性あり)と砥石状の石器も出土した。

石鏃に関して言及すれば形態が三角形から二等辺三角形更に大型から小型まで各種の石鏃が出土している。ほかの遺跡から出土した石鏃と共伴した石器により年代を設定し当遺跡出土石鏃との比較により古い形態を持つ石鏃が多く含まれることが指摘できる。

特徴

本遺跡は縄文時代草創期でも旧石器時代終末期の石器である細石刃や細石刃核と共に土器や石鏃が出土し、旧石器時代から縄文時代への移行期の遺跡であると推定され石鏃や土器の出現を探る意味で重要な遺跡の一つである。

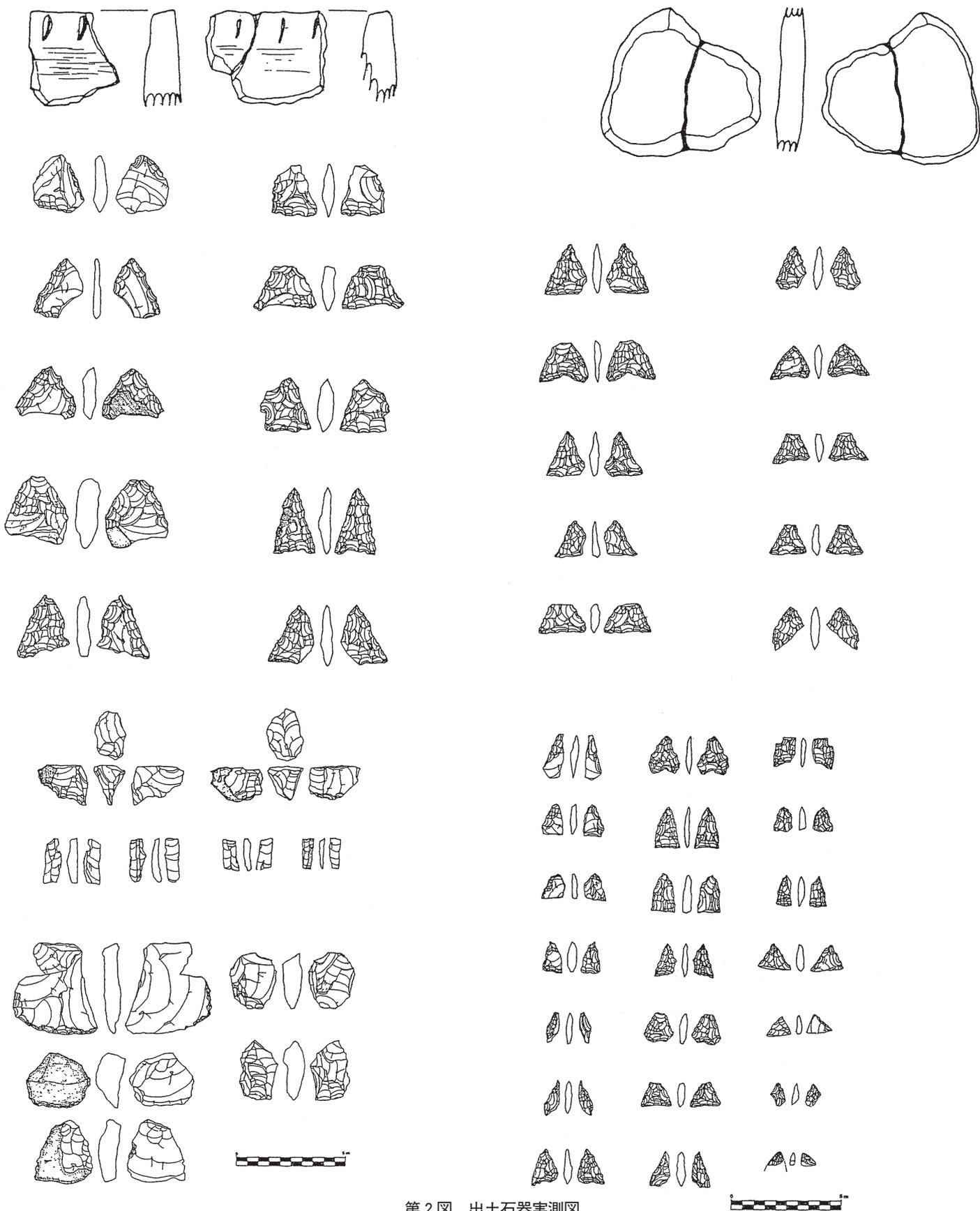
資料の所在

出土遺物は、市来町教育委員会に保管され、一部は市来アクアホール内歴史資料室に展示されている。

参考文献

市来町教育委員会1999「落シ平・瀧之段遺跡・才野ヶ原遺跡」『市来町埋蔵文化財発掘調査報告書』6

(新町 正)



第2图 出土石器实测图